3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎伊藤純子さん（ワークショップひまわり 支援係長／当時40代）

避難している全員が限界の状況の中、障害者への理解を求めることが難しかった。

― ワークショップひまわりの伊藤さんと利用者さん。―

― 開所予定だった新しい事業所は跡形もなくなった。―

地震直後　大地震の恐怖で利用者が混乱。沿岸部の施設では、大津波の危険が迫る。

障害者就労継続支援B型事業所として、パンや焼き菓子等の製造や販売、紙製品加工等の業務請負をしている「ワークショップひまわり」。ここで支援係長として利用者の支援を行っている伊藤さんは、事業所の中で大地震を経験しました。「事業所内にある机やコピー機が走る凶器となり、天井からは吊るしてあるものがすべて落ちてきました。利用者さんは泣き叫んで、“机の下に隠れて”と言っても全く動けない状態でした」。続く余震におびえながら、職員が利用者を囲んで、「大丈夫だよ」と声をかけながら状況が落ち着くまで待機することにしました。

一方同じ頃、沿岸部の気仙沼市鹿折地区に2011年4月建替開所予定だった系列の事業所には、ひまわりの一部の利用者と職員がいました。すぐに高台のひまわりに車で避難することにしましたが、その時、かつて海で仕事をしていた職員が「津波が来る」と言いました。多くの若い職員は、命を落とすような大津波が来るとは思いもよりません。しかし、長年海を見てきた職員が、海が引いていく様子や音、鳴り響く警報を聞き、危険が迫っていると判断したのです。そこで職員たちは海側ではなく山側を通る道路を選び、ひまわりまで戻ることにしました。

その後、鹿折地区は津波と火災で壊滅的な被害を受け、避難路にしようとしていた海側の道も津波で浸水してしまいました。もし海側を通っていたら、大きな危険にさらされたかもしれません。海を知りつくした経験豊富な職員の判断のおかげで、利用者と職員全員の命を救うことができたのです。

避難　障害者の理解が得られなかった避難先で、子どもたちが大きな支えとなる。

沿岸部からひまわりに戻った利用者と職員の無事を確認してすぐ、伊藤さんたちは近所のさらに高台にある総合体育館に全員で避難しました。

体育館には利用者の他に、着の身着のまま、水に浸かった方々がたくさん避難してきました。いつもと違う場所や状況の中、利用者の中には自分のペースを保てない方もいました。「利用者さんはなかなか現実を受け入れられませんから大きな声も出るし、飛び跳ねてしまうなど多動的な行動がどうしても出てしまいます。誰が悪いわけでもないんです。でも避難している全員が限界の状況の中で、どうしても利用者さんがいづらくなってしまいました」。そこで体育館の管理者に別室を借りたいと申し出たところ、「特別扱いはできない」という返答が返ってきました。伊藤さんたちは利用者が健常者と同じ場所にいることで迷惑をかけてしまうことを説明し、ようやく別室を借りることができました。そこで1晩過ごし、翌日になってひまわりに戻ることにしました。

体育館に避難していた時、伊藤さんは同じく避難している子どもたちに助けられたといいます。「体育館の前が砂利道で、車椅子の利用者さんの移動がとても大変だったんです。その時、手を貸してくれたのが小中学生の子どもたちでした。家や大切な物全てが流されて明日が見えない状況で、大人ならいろいろなことを考えてしまうのが当たり前の中、子どもたちは目の前の困っている人を優先して助けられることに感動しました。同時に、防災教育って本当に大事なんだなと実感しました」。

（2 枚目に続く）